



プラネティストが行く 30

お人よしの国民性と レアアース狂想曲

中村 繁夫

レアアースの話題が騒がしい。昔からレアアース資源は中国に偏重しすぎだから危険極まりないと、事あるごとに言ってきたが、ついに対日輸出禁止の事態にまで発展してしまった。

中国がレアアースの輸出枠削減をしたため、外相や経産相がトランプ会談をしたが何の結果も出ず、会談は打ち切りとなった。さらに日本らしい行動は、交渉後1カ月余りで経産副大臣がベトナムのレアアース資源の開発要請にハノイに飛んだことである。昔の彼女に袖にされたから新しい彼女のもとにラブコールをしに行ったような話だから、ベトナム側は「ならば、何を見返りにしてくれるのか?」と新しい要求を突きつけることは火を見るよりも明らかだ。経団連も中国と交渉したが、暖簾に腕押しである。やることなすことピントが狂っているような印象が強いのは何故だろうか?

中国の世論も成熟していないところがあるので、レアアースが外交問題にエスカレートしたようだ。尖閣諸島で拿捕された船長の釈放を聞いた中国メディアは英雄扱いで報道した。中国の友人に電話で聞いてみたら、中国の知識人は興味がなく、冷ややかであったと言っていた。今回の船長を人道的見地から釈放した政府の判断に国内の批判が集中したが、むしろ長い目で見れば、日本の余裕を見せたことにもなる。中国の主権を認めたわけではない。ただしレアアース資源の問題は別であり、こちらを上手く解決しないと話にならないのである。問題の本質は単なる対症療法では解決しない。

西側のレアアース企業は中国に対してある種の誤解を持っている。彼らが最も心配する最悪のチャイナシナリオは、一旦レアアースの

輸出制限をしても、しばらく経てば再度、コントロールが利かず雪崩のように輸出が始まることである。つまり、中国以外の資源開発が進んだところで国際市場が暴落するので、新規投資が無駄になるリスクを恐れているのだ。今回のケースではこのシナリオは考えにくいことなのだが、欧米は中国の資源政策に対して拭いがたい不信感を募らせているのだ。一方、日本人の中国観は性善説が主流であるため、中国の国内事情にも配慮しながら「お互いが協力し合うことで難局を乗り切ろう」という発想に終始している。

今回、レアアースの緊急予算に1000億円を計上したことにも日本人の「人のよさ」がにじみ出ている。代替技術、3R運動、利用技術の高度化に540億円を、レアアース資源の採掘権確保や債務保証、資源国への協力に460億円の予算を計画しているのだ。11月の国会審議を通じて多分、問題なく通ると思われる。

同じ交渉をするなら多少の悪戯心やユーモアがなければ面白くない。例えば中国との交渉の前に相手のハイテク製品を皆で楽しく仕分けしてみてもどうだろうか？ 中国の家電製品のデバイスには特許違反も見つかるだろうし、知的所有権違反製品も出てくるだろう。中国のメディアにも参加してもらって民主党お得意の「仕分け作業」として、専門家にメイドインチャイナ製品を固唾を飲みながら分解させたら楽しい結果が出てくるだろう。欧米の得意な人権問題や環境問題でチクチク中国政府を攻めるのは人品骨柄が宜しくない。露骨に相手の非をなじるのではなく、日本文化に照らして愛すべき隣人が自ら「恥ずかしいから止めておこう」と思わせるようなアプローチが日本的で良いのではないか。それから恩に着せてはいけませんが、レアアースの用途を開発したのは全て日本人の技術であることも遠慮がちに言っておいた方が理解は深まるだろう。お人よし国家日本は何かと言えば頭を下げるのが玉に瑕である。

〔なかもら・しげお〕1947年生まれ。レアメタル専門商社・アドバンストマテリアルジャパン（AMJ）社長。2010年以降の世界経済・株式投資・資産運用法（フォレスト出版）、特別CDを上梓。

第三次中日经济高层对话 第三回日中ハイレベル経済対話

2010年8月28日 中国・北京



8月28日に北京で行われた日中の経済対話。レアアースの輸出規制緩和を求めたが空振りに終わった（写真・EPA=時事 当頁）。Lynas社によってレアアースが生産される予定の西豪州のMount Weld（写真・AFP=時事 前頁）。